

J. Inoué.
Feb. 16. 1956

原子力談話会 ニュース

(No. 16)

新年のことば	(2)
力談常任委員会の満期をひかえて	(3)
原子力研究所	(4)
原子力特別委員会	(5)
原子力基本法の特徴	(6)
会員の消息	(6)
立大原子炉向題の経過	(7)
ジュネーブ会議の論文の貸出しについて	(13)
東京支部の近況	(15)
書 評	(18)
新刊紹介	(20)
新会員紹介	(20)

1956年 No.1

原子力談話会 発行

c111-024-040

新卒のことば (おわびを兼ねて)

昨年富士の湖畔で生まれた原子力談話会も、今年で足かけ3年になり、会員も順に百名を越すまでに成長しました。

しかしこれまでの談話会の発展は決して円滑なものではなかったと同様に、今後もますます種々なねばならぬ事が少なくないと思います。わが国の原子力は、今年からいよいよ現実動き出し、しかも相当ギクシャクしながら突き進むようです。こういう情勢のもとでは、談話会の組織もたえずフレキシブルにして、いやすくも柔軟硬化をおこなうことのないよう心掛けたいものです。

その為、新年早々この力談ニュースの発行がおくれてしまったことは本当に申し訳ないことです。これまでのニュースの編集、印刷(かり切はアルバイトに頼んでいました)、発送を、東大物理の地下室で殿部、大塚の両君がもつぱらやってくれましたが、昨年暮、大塚君が電源開発株式会社原子力調査室の方へ就職したので、コンビの仕事の能力が低下したのが最大の原因でした。

この新年特大号を契機に改めて態勢を立てなおしましたら今年は大丈夫と思います。(印刷は全部外へ出すことにしましたので、会費の収入は益々大切な要素になつて来ました。御協力下さい)。

それにして、東京にいるものの心配は、談話会の地方支部の健全な発展してくれているだろうかということです。原子力は東京で花々しいですが、しかし、地方の地味な活動と、その上にたつ批判なしには力強い正しい発展はのぞめないと懸念します。ニュースの毎月確実発行を考えている現在、ぜひ積極的に原稿をよせて下さい(どうかマス目のある原稿用紙に書いて下さい)。

東京の様子は、本号ニュースの「東京支部の近況」をよんで下さい。

また、この談話会の常任委員はすでに満期に近づいていますので、その次のえらび方を考えてほしいと思います。

会員の皆さんにとくに興味のあるものとして、原子力研究所のことと、学術会評の原子力特別委員会のことと報告がのっています。その他の記事もじっくりよんで下さい。

今年からますます、私たち若いものを中心にした集りが本当に必要だという気がします。ニュースを皆で育てようではありませんか。

(ニュース編集部記)

力談ニュース

力談常任委員会の満期をひかえて

— 55年12月記 —

54年の暮にあわただしく実施した力談運営委員(および常任委員)の選挙に頭を悩ましたのもまだ忘れていないのに、もうまた次期選挙の時期が来て、常任委員会はまた頭をなやましています。

というのは、すでに百数十名に近づいた大世帯の力談の委員選挙は、よほどよい方策をみつけないと、努力する割に実りの少ないものになるからです。実際、先の選挙の場合、専門分野からの代表など、かなり複雑な選出方法を考へ出した割には、現在の運営委員会(およびそのうちの在京者よりなる常任委員会)は実質的には十分なものではありませんでした。

このため、今年度の選挙は、この12月をすこし過ぎて1月か2月になつてもよいから、よく会員の意見をきいて、実際に取した方法をとりたいと思います。

先日、常任委員の話し合いで一本思いついた案は次のとおりです。

まず、1956年度は各支部の体制を確立させることを主眼とする。この前提に立つて、中央(東京)の委員の人選は、まず各支部が討議して、その支部にとり、また力談全体を考へて最良と認む東京在住の人を何人か指名する。このなかから、たとえば全会員の直接選挙によつて、委員を決定するという案です。これは、本当に力談の世話をする委員をえらぶ点では今の力談にもっとも適当なといえると思います。

こういう事柄ですから、各支部あるいは会員個人ができるだけ早く、選挙方法について意見を送つて下さい。

[常任委員会報告]

大塚記

原子力研究所

昨年ノノ月三日日発足した財団法人原子力研究所は、最近、所長を駒形副理事長が兼ねることがきまり、目下のところ、新橋のダンスホール「フロリダ」の前、旧との東電ビル内の大部屋を一つ借りて住んでいる。

ところでその人事であるが、現在、軍需の方で決まっているのは、科研の杉本氏、日立中央研の神原氏（所長はいまウオーター、ハイラーの買付交渉に渡米中、二月未帰国）、それに経済企画庁から来た阿部滋忠氏のオリエで事をすすめている。研究所の準備室なるものを作って、所外の専門家の助力をえている中には、たとえばアルゴノメ帰りの大山彰氏もいるが彼は東大工学部助教授の地位を振る様子が見えない（兼任か）。

さて吾手の方では、すでに杉本氏の下の本本、石川両君、神原氏の下の大野、朝面両君、最近はいった人では、平田（科研）、夏目（東大、化）、杉江（東大、物）、住田（電カ中央研）の諸君、また津見（東工大）、西村（教育大）の両君も近くはいるはずである。この中には、談話会の会員も何人かいるので内外助け合つてゆく方針をとるべきだろう。

さてこれからあとの人事が、目下“公募”されている。つまり、ノ月三日メ切で、全国の有力な会社、大学、研究所に推薦依頼を200通ほどまいた。ところが、応募の条件が、協賛性に富むこと、自体強健なこと、というだけで、人選の方法については何もあられていないため、各所からその実体を虚構されている。

しかも、この研究所に大口の寄附をした電力会社関係からは何人かかつ実質上のヒモ付きで人を出すことになり、出す以上は答すのはまかりという約束があるように見える。

学界からの批判としては、まず湯川原子力委員から文書で研究人事について質問したものがあり、駒形所長が長文の返答を出したというが、近く原子核研究者の方のニュースで知れよう。

財、業界では、この研究所が動力炉のことを目下すこしも考えていないといつて非難しているようである。

この研究所は、周知のとおり、今国会でできるはずの、本格的な原子力研究所（公社かそれに近い特殊法人にならうが、大蔵省の国庫主権が強硬である）に競争する。このとき引継かれる既成華実が向意だが、中でも人畜がきつと尾を引くことになる。

渡辺根氏がこの研究所の重要ポストにつくかどうかの未だに確たる眉裁はない。

現在、新聞で報道されているように東北の決定向題が焦眉の急になっているが、しかしとにかくこの財団法人研究所はスタート早々からモタモタしていて、明確な性格がほとんど感じられないのは何としても痛ったことだといわれている。

こうなつては、よほどの大物が牛耳るか、民主的専制制的な組織が育つまでぐんぐん仕事をすることはできないだろう。しかし、このことは、研究所を軽視してよいということではない。

原子力特別委員会（学術会議）

昨年秋の学術会議で、原子力特別委員会を設置することがきまり、原子力向題委員会（これまでの顧問委員長の後任に伏見幹事がついた）が産婆役をつとめ、いませ話人がきまつて、関係組織に推薦を依頼している。たとえば、原子核特別委員会や、学術の原子炉設計班、日本化学会などである。

この委員会は、原子力に関連する専門のオノ線学者が集つて、学界の意見の連絡、調整をばかり、専門的立場から従来の原子力向題委員会と協力し、また外部の関係機関（原子力委員会など）とも連絡しよう。原子力の研究者は今のところバラバラなので、この委員会もどの位しつかりしたものになれるかは、産婆役にもよくわからぬのが現状らしい。しかしここで今後の大学の原子力研究のあり方、やり方について基本方針を打出すようにならねばならぬといふ期待されている。

原子力基本法の特徴

原子力基本法は、先の臨時国会で、衆参両院ともあつけなく通過しました。

表された問題点は大きく分けて次のようなものです。

- 平和利用に限定する、学術会議の3原則、国際協力など、その目的や基本方針は正しくなっている。
- それを具現すべき実務問題になると、あやしいところが少なくない。
- たとえば、原子力研究所の性格は、未決定のままおかれている（公社か特殊法人か）——今国会でまざるはず——。
- 原子力委員会は、実施権をもたぬ審判機関となりさがつたが、しかもその事務局は、原子力局として、総理府の下にこの委員会と形式上並置される。したがって両者は名実ともに上下関係になつていなければならない。運用如何では二本柱となり、さらに、委員会が宙に浮いてしまう危険が多みにある。
- 今回の基本法中には、「別に法律で定めるところにより」という但し書きがいろいろある。国家管理のあり方を規定することになるこれらの法律が今後どう定められるか注目して見なければならぬ。

会員の消息

- ◆ 武谷清昭君 ノノ月からアルゴンヌの原子炉学校に行つています。会員の皆さんによろしくという葉書が来っています。
- ◆ 服部 孝君 ノノ月に盲腸を手術しました。もうすつかり元気になりました。
- ◆ 古川和男君 ノ2月9日京都で結婚式を挙げられました。
- ◆ 大塚益比古君 ついに電源開発会社に就職、いよいよ奥さんが居いらしい。

立大原子炉問題の経過

昨年9月下旬の朝日新聞に突然「立大に原子炉奇蹟か？」の見出しでセンセーショナルな記事が出版された。これを讀んで驚かされた方もあるでせうし、疑問を抱かれた方も少なくないと思つたので、問題の経緯をかりつきんで御報告し諸兄の卒直を御意見を承りたいと思つた。〔筆不精のため報告が遅れて御詫ありません〕

話の起りは昨年6月頃にさかのぼります。

その頃、'Living Church' という米國聖公会発行の英語新聞に、大体次の内容の記事が掲載されたことを、この大學に来ていた米人教師から教えられました。それによると「米國聖公会のワシントン教区が、来る9月にホノルルで開かれる（世界）聖公会の大会に、「檀家にパイルを寄贈することにしたい」という提議をすることにきめた。その理由は、檀家ははじめて原爆の洗礼を受けた地域であり、この地域の適当な施設にパイルを寄贈して医療その他の平和目的に使わせることは、教会の活動として誠に有意義だと認められたからである。そのため米聖公会で50万ドルの募金を始めるよう提議する。炉は毎年25万ドルの維持費がかかるような施設の適当な施設に贈られる。炉はアルゴンヌに現在あるような実験炉が適当であると思われる……」 というのです。

この話を聞いた私共理学部物理教室では、早速このことについて話し合いました。その結果、立大は日本の聖公会に属するミッション・スクールで、檀家の聖公会関係の学校としては最大のものであり、しかも同じミッションの聖堂で聖路加病院が近くにあるという点を考えますと、寄贈を受ける有力候補であると思われる。立大に炉がくことは結構なことで、得難いチャンスであるから、ともかくこのまま見送りにせず、何か「話をうたひでおく」手を打つべきだ、と

いうことになり、とりあえず中川重雄理学部長から松下総長を通じてホノルル会議に出席する八代司教授の旨をめぐるとともに、調査を進めることになりました。

当初この話が物理教室で出たとき、「三原則」の問題はまず先に話題に上り、中川さん以下全員一致で「三原則の額でやるならば受入れてよかろう」ということになり、調査委員会をつくることになりましたが、これは人選までは行われず、元々部長の杉浦先生に委員長になつていられたことだけがきまりました。しかし具体的な調査は早速必要なので、田島英三教授が炉の経費や必要人員について、若干の資料をあつめられ、これについて検討しましたところ、向うが suggest しているような CP-5 クラスの大型のものはともかくとして、小型の実験炉なら、25万ドル/年まではかからないだろうが、それでも年間数千万円はかかると覚悟せねばならぬという結論がでました。このところ、この話をヒキツたするかどうかは論議され、まだ話がさんざん投函のときに新聞などで騒がれては困るが、その半面三原則の精神からしても現時点では何らかの方策をしろせとあくべきだということになり、朝永委員長に早速中川先生か武岩先生が会われることにきまり、通告すべきことからメモにまとめられました。要するに「旨下考慮中、調査中」という内容のものでした。

夏休前の状況はだいたいこんなものでした。(おおこのころ、中川部長が松下総長に会つて三原則の説明をされたということもありました)やがて八代司教授がホノルルで誘致演説をやり石巻などの視察を終えて帰国しました。

今日、朝日のスクープで一昨下火となつていた炉問題が再燃をはじめました。何といつても最大の論点は朝日の記事にあったように、10月の米国聖公会の幹事であり、オークリッジの核研究所長(Oak Ridge Inst. of Nuclear Study)のホラード氏

が立教にやってくるという一件でした。彼は正式には読売の原子力博覧会に米国エネルギー省から派遣されてきたのですが、ちょうど出発前に聖公会の「原子炉高層委員会」の委員となり、実質的にはこの問題は彼がほとんど一人で担当しているにたがひなく、実質的には視察以上のものでした。

ホラード氏を迎えるにつれての論争が活発に斗わされました。物理の教室会議、化学の教室会議、全学教授懇談会* (職員全体会議) (* 即ちしばしば教員と臨時) など多数の会合で炉問題はいろいろの角度から縦横に検討されました。詳細は忘れた点もありますが、紙面も許しませんので主な論点や結論(ホラードに会うまでの)だけを挙げてみますと、

① ホラードに冒頭三原則を提示し、これをわれわれの受入れの基本的前提とするのだということを確認することの長所。これについては中川、田島氏らの反対意見(まだ交渉の段階ではなく、向うから様子を見るべき場合なのだから、こちらからの難かしいことを持出しては不チコワシになる)と、主に理論物理の会集、豊田氏らの賛成意見(原則なのだからマツサキにいうべきで、後から来て集クツになるべきではない)とが正面から対立し、中々結論が出ませんでした。結局最後には「万一これを言つたために不チコワシになつたような場合の責任を取ることを承知なら」というようなところでホラードとの会議での自由な発言がようやく許可されました。

② 三原則、とくに人事の民主的運営について、中川氏は「研究に参加するのは誰でも(能力さえあれば)自由だが、立教大学がこれをやとう場合には立教の方針に従つて思想や政院所属の有無などが当然問題にされる」という解釈と、主に物理系からのいう「完全な民主的入事——立教がやとうときでも三原則の額でやるべきが本来だ」という考えが対立し、この方はまだ結論がでませんでした。そしてまた、このような「解釈の不一致」があるのだからホ

ロードに言っても混乱を起すおそれがある、との意見も出ました。

③ 受入れについての名人の懸念の程度が知りたりの中川氏の希望で、物理教室会談の席上、スタッフのひとりひとりの考えを言うよう求められました。その「意見分布」は、炉があること自体は学校としては有意義だという点で全員一致していましたが、自分自身が積極的に参加するかどうかはマチマチで、「自分本来の研究ができなくなるのは困る」との意見が半数くらいありました。

④ 「今まで築いてきた基礎研究と圧迫しないうる」との要請はとくに化学科あたりで非常に強く、今までの研究をすべて *Operator* をやらされるのは叫びたい、ということも炉の予算や人事は今までの学部のものとは別個に考えてほしいという申入れが総長に存され、総長はこれを承認しました。ついでながら、総長は「三原則を尊重したい」とも述べ「もし政府のカントクが行き過ぎで三原則に反するようなことを強いるなら斗おうではないか」ともいわれました。化学部（文学、至学）などでも、自分らを圧迫されては困るという世論は強く、また立教職員組合は、炉の導入を口実に給与がギセイにされることになりよう申入れています。

このような議論ののち10月12日曜ロードと総長、理学部スタッフらとの会談が行われました。ロードはしきりに自分の意見は全く *personal* なものと強調していましたが、立教は有カとみたらしく、帰りぎわにはしきりに「自分もできるだけ盡力するから今後連絡してくれ」と言っていました。語は大体技術的な話で炉にはどのような附属設備が必要かというような解説や、どのような研究計画があるのかという質問などをしていましたが、三原則については賛意をいしめし（じつはそれより少し前に武谷教授が京都で湯川氏らと共にロードに会いくわしく説明してあったので、彼はよくのみこんでいたようです）、またともはつけないう述べていました。またひとつ一寸驚ろいたのは反う燃料（多分、濃縮U）が双務協定

の6kgの中に含まれるのの別口をきいたところ、「燃料については心配しないうる」との返事だったことです。そしてまた6kgの枠は多分おえるだろうというようなことを言っていました。種類していたのは、「まだ何にも決っていない。次の聖公会の大会が3年後（1958）にあるが、そのときに本決りにする。今の炉はただ炉の奇蹟の9人委員会ができたばかりのところだ」ということでした。要員の教育は誰かひとりロスアラモスのオークリッチによこせばよい、と云う、総長は「それ位の金は何とかする」と言明しました。炉理としては *Swimming Pool* がよきように云っていましたが、また日本で水を入れる炉とがブルのもつまらないだろうとも云いました。12月上旬の教授会でこの会談の内容の報告が行われるとともに、交渉を早運進めるかどうかについて賛否（或る）が問われ、議論の末、理論物理の3人が「慎重に」という意味で反対、残りの約25人が（基礎を圧迫しないうるという条件のもとで）賛成、と云う結果になり、1955年が暮れました。そのころ化学部は理学部の独走を惧れ至学学部あたりからの要請で全学教授懇談会の開催が計画されましたが年内には間に合いませんでした。

明けて1956年冒頭の教授会で学部長から、某大会社から立大炉の面的援助の申入れがあり、また総長は4月に渡米するので（総長は財源のことはマカセマくれ、と何度も言明しておりますが具体的にどうされるつもりかは示してくれませう）それまでの財源の目算をつけたこともあり、至急調査委員会をつくりたいとの提議がありました。全学教授懇談会をそれよりも先に開き、全学の意見を先づかめるべきだという豊田氏らの反対もありましたが、賛成多数で選挙をすることになり、田島、村地、他2名の教授が送られ、これについて化学部でもきまり、委員会が発足しました。ただ理学部では委員会が調査委員会に止まるべきこと、公衆を旨とすることなど、いくつかの条件がつけられました。

上記会社の援助はその社長と会社との交渉でありはのほのほしくは進まない模様ですが、このとき(ノ月20日)松下社長が正カ原子力委員長に会いに行かれ、次の重大な返答をもらわれました。すなわち 立大の受入れは促進してほしい、維持費は政府で出せる、そのかわり箇の指定する場所(恐らくカ研のこと)に置いてもらいたいと困る。しかし「立教の炉」としてよい。というのです。これはまだ(ノ月24日現在)正式の会議には出ていない話ですが、理学部では態度を検討中です。いつたりこれを果して立教の自主性、主尊性が保てるかが不確かであり、カ研の下請けになるのではないのかという懸念を皆が抱いています。

また発足する立大炉調査委員調査費(約100万円)をとりあえず要求すると思われていますが、中川理学部長はこの程度の負担は経費でマカナウのを認めてほしいと云われます。しかし前任社長が「炉予算は別に考える」と言明されているので田島、豊田教授らはじめ物理、化学のスタッフの大部分はその言明を尊重して「別口」を主張すべきだとの意見で、ここしばらく簡単かつつきそうです。

なおノ月20日開かれた重合(全学)教授懇談会には、総長、理学部長は欠席され、主に田島、豊田両教授から「炉とはどういうものか」について説明、質疑応答がありました。とくに、炉そのものは今の理学部の研究に直接役立つというよりも、むしろもつと応用的なもので、田島教授あたりも、「もし自分が炉をやるとしてそれは理学部の人財としてやるのではないことだろう」と *suggested* され、注目を引きました。

これが今までの大体の経過です。カ研には昨年ノ月始め頃、東京支部の「ジュネーブ、セミック(国際会議発表論文の紹介)の席で小川、豊家らで報告、説明し、討論してもらいました。そのときの参加者の意見として、

- ・もつと実情をひるめる努力をする。

- ・双務協定との関係をもつと語る。
- ・日本全体の情勢とニラミ合せる。
- ・立教学内の組織をかためる。
- ・炉そのものに振られることなく、「炉問題」として弾力性ある努力をする。

など可能な意見が伺えました。報告が中々まとめられず「実情をひるめる」努力があらわれなかつたことを心からおわびします。しかし学内ではカ研の会員こそ僅か2名ですが、この問題を機軸に教員相互や学部相互の話し合いが活発になり、ことに当初のやや抽象的な原則論が、この頃ではもつと現実的、「学部の現状に直対」の線へ発展し少くとも物、化、星あたりの意向が堅実なまとまりを呈せつゝあり——これこそ学内の範囲内での「自主性」の要求だと思ふのですが——普及立つことなく実力ある世帯となりつつあることはいささか寂しさを抱くに反ることで、どうか補綴助、補綴告をおねがいします

(小川 若雄 記)

★ ジュネーブ会議の論文の貸出しについて、★

毎日新聞社の結田明氏およびカ研の立花君の好意により、ジュネーブ会議の論文の一部(約300冊)をカ研に寄贈していただきました。会員の皆さんにできるだけ利用して貰いたいと思います。事務局においてありますから、東京の方はなるべく取りに来てください。と返ります。他方の方は郵送しますので申込んで下さい。

一添紙のような貸出規則を作りましたからこれにしたがつて下さい。

- 貸出は原子力談話会会員に限る。
- 期間は一週間としてノカ月以内、(ノカ月以上たつて他の会員から要求があれば必ず返すこと)。

○冊数は時に制限はしないが、なるべく共同利用というのを考
えること。

○帯出者はノートに必要事項を記入しておくこと。

現在ある論文の番号は次の通りです。(類目は一々書くわけは行
かないので、他で調べて下さい。)

- 2, 4, 5, 6, 8, 10, 11, 60, 61, 63, 77, 78, 79, 82,
85, 88, 89, 90, 101, 103, 104, 105, 106, 110, 112,
119, 123, 127, 149, 159, 163, 164, 180, 182, 183, 224, 235, 238,
240, 242, 259, 260, 262, 275, 278, 280, 281, 310, 314, 319, 326,
327, 333, 334, 335, 336, 339, 343, 345, 347, 349, 350, 354, 355,
356, 357, 360, 361, 362, 365, 370, 371, 383, 387, 389, 390, 392,
393, 394, 398, 400, 401, 407, 409, 404, 405, 406, 407, 410, 421,
422, 423, 425, 426, 428, 430, 432, 435, 436, 442, 443, 445, 447,
449, 450, 451, 452, 456, 457, 459, 460, 462, 463, 471, 477, 478,
481, 485, 488, 490, 497, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500,
501, 521, 524, 533, 534, 535, 537, 540, 544, 545, 551, 552, 555,
561, 573, 576, 577, 580, 581, 586, 588, 589, 590, 591, 592, 593,
594, 595, 597, 598, 602, 606, 607, 608, 611, 612, 615, 617, 619,
620, 621, 622, 623, 624, 627, 630, 631, 632, 636, 639, 640, 641,
642, 644, 645, 646, 649, 650, 651, 656, 658, 659, 660, 661, 663,
665, 666, 667, 669, 671, 674, 677, 680, 681, 683, 684, 686, 689,
691, 694, 695, 697, 702, 704, 706, 710, 711, 713, 716, 733, 745,
746, 749, 750, 751, 753, 757, 758, 760, 762, 764, 770, 774, 775,
776, 784, 785, 786, 787, 789, 790, 793, 806, 811, 813, 814, 815,
816, 820, 821, 822, 823, 825, 829, 830, 831, 832, 834, 835, 836,
838, 845, 851, 853, 860, 862, 866, 868, 870, 871, 872, 876, 879,
880, 881, 882, 888, 890, 893, 898, 899, 900, 902, 904, 913, 915,
921, 927, 929, 934, 936, 938, 940, 942, 943, 949, 952, 953, 958.

962, 964, 977, 977, 979, 1002, 1006, 1089, 1119,

おねがい。

ジュネーヌ論文を複写された方が多いと思いますが、余分があり
ましたら(またはネがそ持つておられましたら)、是非ノ部カ談に
寄贈していただけますでしょうか。(既にあるものと重複しても
構いません)。

東京支部の近況



● 分科会の報告

東京支部の有志でやっていた情勢分析会は久しく開かれることが
なく、55年11月3日に10人ばかり集って、原子力研究所の理事
の向題(藤岡氏がボイコットされた経理、菊池氏の態度等)を中心
にして最近の情勢を検討し合った。

12月13日には常任委員会をかねて開く筈であったが、集まり
が薄く(7名)、カ談自身の出席や当日開かれた原子核特別委員会
の様態などを話し合った。

● 12月29日

東大前の新屋の2階で東京支部の忘年会を開いた。出席者は伏見
塚庄はじめ、4名。灘の酒作り、イオン交換樹脂を扱う話や、クラ
フタイトの不純物の定量法、石炭のでき方と地球化学の話、南極探
険、科研の首切りの話等、いろいろな話に花が咲いた。各分野の人
たちが集って話合える機会ができたということがカ談の成果の1つ
であろうという意見が出て皆同意であった。

● ジュネーヌ報告ゼミナール

東京支部会員の有志は昨年の秋から毎週水曜日の夜、東大でジュネ

一、学会の報告のゼミナールを続けてきました。大抵クダ人集まつてやっています。いろいろの分野の人が集まっているので、あまり細かい問題は取り上げず、割合に概略的な論文を拾って紹介しあっているが、それでも互か互か勉強になります。今年からは、希望を調査して水曜の夜に改めたが結局出席メンバーは余り変わりませんでした。

一方、ノ月末から「原子炉物理」のゼミナールを、電産開発株式会社の本会談室を借りて火曜日の午前中にやり朝ネゴの大学関係の人に早起きの練習を強いることになりました。

● 1月11日

森、立花、庄司、大塚、服部君らは、原子力委員に就任した有沢広成氏と会見、日本の原子力の研究の進み方についてわれわれの心配しているような点を説明し、有沢氏が委員会内で積極的に活動されるよう要望した。今後もノ月にノ度位づつ会って意見を述べてほしいとのことであつた。有沢氏は時に委員会の監視役であることを強調されると同時に、既にスタートしてしまつた原子力研究所については、やはりこれができるだけ良いものにして行くように誓が努められてほしい旨を希望された。

● 1月14日

東京支部の有志ノ5名ばかりで、毎日新聞社の部屋を借りて、昨年末アメリカから帰国されて、進退を注目されている渡辺城彦先生に、若い連中の意見を述べる会とりののを開いた。

今まで、およぶ現在われわれがいろいろの立場で感じている矛盾や不満な点について少しづつ意見を話し合ったが、人数が多かつたせいもあつてあまり突込んだ話にはならなかつた。

渡辺城彦さん自身は、日本の原子力研究の行き方にわがらなりの点が多く、目下勉強中であつた例えば電力値の本当のことかわかるような資

料がほしい、原子力研究所に行くかどうかはいろいろ反対もあるまでもまだきまつていない。若い人たちの意見というからもつと要ましいことが聞けるのかと思つたが、おえら方さきい話と同じことが多かつたといふことを言つておられた。

● 1月15日

森、大塚、立花、夏目、服部君らは、稲田屋旅館に湯川先生を訪ね、原子力研究所の最近の動き方、研究者の態度等について相当具体的な突込んだ懇談をして来た。湯川先生は、大変だけれども委員会の中ではできるだけの努力をするから、研究者の側もなるべく意見を統一して、研究所がどのような体制をとればよいかを考え、どのような人に入ってもらいたいのかを出してほしい旨を述べておられた。そして委員会の仕事は、基本的な方針を確立することが一番重要なことであることを力説しておられた。

暫く討論した意見をどしどし積極的に言つてあげることが、先生をバックアップすることになると思う。

● 1月17日

東京支部の有志ノ6名は、佐々木君の好意により、藤沢にある東海電機技術研究所のおよぶ茅ヶ崎工場を見学させていたのだ。

夕時2ノ分東京駅発の湘南電車に乗込んだ一行は、お天気は良いし、まるで遠足気分、先づ富士山と比叡海岸の見える木い松林の中の研究所を見せてもらつたが、いろん人は専門の連中がいろいろのものを、何を見ても誰かが何か一言言わないと気がすまず、ずいぶん熱心な見学風に見えるのみも知れない。佐々木君の手製のマイクロフォトメーターに感心してから昼飯を御馳走になり、午後は自動車で茅ヶ崎に行つて工場見学、技術課長さんが親切に案内して下さい。始めてクラファイトなるものの工場を見て一頁キヨロキヨロばかり、お行儀の悪い連中だといふ評判がたつたのではないかと心配してい

だが、後で書いて見たらそんなでもない様子で安心した。なおこの
見学会は、幕の忘年会の席で佐々木君にお願いして希望者を調べた
ので、連絡のできなかった人が多かったが、他にも希望者が多けれ
ば、又佐々木君に無理を言ってお願ひしたいと思ひます。

楽しい震災だったので、又どこかに行きたいという声が多いが、
良い所はないでしょうか。

書評

原子戦

— 神保元二 —

まざまざ世界は原子爆時代であることは充分知っていたが、「日
本でも原子爆兵器を」と云う砂川長官の言葉には矢張り驚かされた。
ところがそれは単なる放言ではなく、原子爆の被害を三度うけた日
本でも、原子爆戦の計画が着々具体化されつつあることが、この
「原子戦」なる本で明らかになったので、ゾッとせざるをえなかつ
た。

この本はもと陸軍中將(らしい) 稲田正純が監修して、9人の旧
軍人、軍事専門家(自衛隊に発言権があるらしい)が各部門を担当
執筆したものである。

いずれも戦争があれば当然原子爆がじゃんじゃん使われ、それに
負けずに頑張りつて戦い続けよう、と云う考えが前提になつてい

るが、より具体的には全く完全と云つていい程イギリスの「国防計画」
(1955年3月、英国防白書)をお手本にしている。イギリス
の国防計画は、一たび攻撃が加えられたら、即刻原子爆で敵の中心
地に攻撃を集中するよう準備することだけが平和を守る、と云う考
えである。陸軍や海軍は大体補助的な役割になるが、植民地の彈圧
などでは重要であるとする。実はこの思想はノ年以前にアメリカ
がいわゆるニールツク戦略として採用しているものであるが、番
台のことだこゝに書いてある人達はアメリカを手本にするとは一言

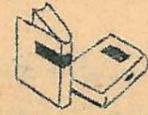
も云はず、もつぱらイギリスを引き合いに添す。これはまさかアメ
リカのまぬでは誰も問題にならないと思われるからで、イギリスな
らアメリカの前線基地である点日本と同じ条件だと考えたのだらう。
ところが、イギリスの国防白書はアメリカに対抗してその前線基地
の役割から脱して独自性を持ちたい、と云う一面をもつていたのだ
から、その点もイギリスの真似をすべき(勿論実際にはできない)
であつた。ところがアメリカの戦略は頭からのみこんでしまつて、
(アメリカの批判検討を殆んどやつていないのがこの本の特徴の1つ)
その一基地としての役割ではイギリスを真似る。当然つじつまが
合わなくなつて、いたるところでぼろがでている。それが一番ひど
いのは総論的に日本のことにもふれた最初の論文で、10行おき位
に云うことがあつていてみじめな有様である。

ところがふとたび各論にうつつて、やれ大隊編成がどうの、甲級
の厚さがどうのと云うことになる。分析はたわかに生々として具
体的になる。つまり彼らはあく迄昔ながらの戦術技術家であつて、
戦争そのものを大きくとらえて戦略を考える能力はまるでなく、従
つて戦争の性格を質的に変えた原子力を正しく評価することは全く
不可能であることが分かる。それは驚く程はつきりと示されている。
勿論原子爆戦での数方の非戦闘員の死傷など、全く兵隊として扱わ
れ、大して問題にならない。

新日本軍を原子戦の前線部隊にしようとしている者が、どれ程ひ
どいであらめな考えをもつていられるかを知るには本書も役立つ。し
かし原子戦の本質を知ろうとするには全く無用である。

とに角痛感したのは、国民の原子爆禁止運動を正しく戦争の批判
に何れ、軍人の護手盾デマゴギーをうち破るのは科学であり、今こ
そ特に原子力に關係ある科学技術者が、具体的に戦争を勉強してお
かなければいけないと云うことであつた。(神保)

★ 新着雑誌の内容紹介は次号へ！



新刊紹介



◆ 原子カハンドブック、原子炉権(上)について

カ談のメンバーが翻訳したものを、取部君が金岡氏と協力して整理して S. Glasstone の新著 "Principles of Nuclear Reactor Engineering" が商工会館出版部から「原子カハンドブック、原子炉権」として出版されることになり、既に上巻は発売中ですが、カ談の会員には定価の2割引(800円×0.8=640円)で入手できるようにして貰いましたので、希望者は事務局に申し込んで下さい。

なおこのハンドブック、シリーズの他の本(基礎篇、磁石篇)についても同じように扱っています。

◆ 「英連邦とその原子カ開発」

英国大使館情報部で上記のパンフレットを無料頒布中です。カ談でも少し貰いましたので支那その他には少数量送りしましたが、その他にも希望者があれば、

東京都千代田区一番町、英国大使館情報部
あてに直接申し込みを送つてくれます。

(なお、この翻訳はカ談のO君が手振ったものです)

◆ 「J史における科学」

バナーの新作「J史における科学」を眞目君が翻訳したものが、みずが書房から4分冊になつて発売された。定価は各冊280円ですが、カ談の会員は定価の2割引+送料で入手できますから希望者は事務局に申し込んで下さい。

なお3月×切りで賞金ノ率ノ0万円の書評募集がついていきますから、我々と思わん方は是非どうぞ。

新会員紹介

氏名	所属	単刊	紹介者
小方 貴	京大理	物理	西田
上柳 英郎	島津鐵作所	"	武 藤